

「祇王・Guiuǒ」を巡って 3

市井外喜子 (大東文化大学名誉教授)

A Study of “Guiuǒ” 3

Tokiko ICHII

要旨

- 1 祇王章段が古典平家巻第一から移行し、天草版平家巻第二冒頭章段 Guiuǒ 章段となることにより、巻第二の平家衰亡の前兆が明確に描かれることになる。Key word は「fuxiguina coto」の連鎖と、「年項目ごろもあればこそあったに」の連鎖にある。
- 2 壇浦合戦後の建礼門院を一括して描く「灌頂巻」を持つ高野本（覚一系統本の代表として）を核として、「灌頂巻」を持たず、分散して建礼門院を描く国会本（百二十句系統本の代表として）・屋代本（古態を残す語り本系の代表として）の特徴、および天草版平家の建礼門院を観察した。高野本では、巻第十二までは目立たなかった建礼門院が十分に描かれ、叙情的な要素も濃い。一方国会本では、建礼門院は時間の流れに沿って、分散して描かれ、記録的な・叙事的な要素が濃い。天草版平家物語の建礼門院は、国会本に近い描写が多く、仏教臭を排除し、より叙事性が濃くみられる。「灌頂巻」で注目されるのは「女院死去」である。奇端往生を遂げる建礼門院が叙情的に描かれている。

目次

- 1 はじめに
- 2 祇王章段・Guiuǒ 章段の位置
- 3 「灌頂巻」（高野本）と編年体（国会本）の位置
- 4 おわりに（まとめとして）

参考図書

1 はじめに

『大東文化大学紀要』人文科学 第56（2018年3月）に「祇王・Guiuǒ」を巡って 2 を報告した。

「祇王」章段をとりあげ、「Guiuō」章段との比較を人称詞（自称詞・対称詞）から吟味した。祇王・仏間の「わごぜ」→「jonata」の変化、仏の「わらは」→「vatacuxi」など、言葉の変化は時代を反映することを示したものである。

今回は、前回と同じく「祇王・Guiuō」章段に注目し、両章段の位置を吟味することに加えて、壇浦合戦後の建礼門院を一括して描く「灌頂巻」を持つ「高野本」（覚一系統本の代表として）・「灌頂巻」を持たず分散して建礼門院を描く「国会本」（百二十句系統本の代表として）・「屋代本」（古態を残す語り本系の代表として）との比較を行なう。加えて「天草版平家」との吟味を行ないたい。

『天草版平家物語』は、1592年イエズス会天草学林から出版され、原本名を『日本の言葉とHistoriaを習ひ知らんと欲する人のために世話にやはらげたる平家の物語、(FEIQENO MONOGATARI)』とするものである。

聞き手兼進行役をつとめる右馬の允(VM.)と、話し手の喜一検校(QI.)が「兩人相對して雑談をなすがごとく」にとの編纂目標にしたがって、「検校の坊、平家の由來が聞きたいほどに、あらあら略してを語りあれ」と右馬の允が請い、喜一が「やすいことござる：をうかた語りましょう」と受けて、平家物語の大略を、当時の話し言葉によって語る（対話形式）ものである。これがキリスト教布教のために来日した当時のイエズス会宣教師のための日本文化・日本語学習のテキストである。

2 祇王章段・Guiuō章段の位置

最初に古典平家物語巻第一「祇王」章段の位置を見ておきたい。

「祇王」章段の位置を、次の『平家物語』六本によって、確かめることにする。

- 1 屋代本 『屋代本高野本対照平家物語』新典社
- 2 国会本 新潮日本古典集成 『平家物語』新潮社
- 3 斯道文庫本 『百二十句平家物語』汲古書院
- 4 高野本 新日本古典文学大系 『平家物語』岩波書店
- 5 葉子十行本 日本古典全書 『平家物語』朝日新聞社
- 6 流布本 『平家物語』おうふう

なお天草版平家物語は、『天草版平家物語対照本文及び総索引』（江口正弘著 明治書院）を用いる。古典平家「祇王」章段の収載状態を、明らかにする。収載位置が諸本により異なりを見せている。

- 屋代本 目次には巻一清盛出家事→白拍子義王仏閉事但有別紙→二代之后立事送御院 本文は巻十二の後に、「平家拔書一卷之内義王義女仏閉事同出家事」として、収載されている。
- 国会本 巻第一第四句額打論→第五句義王→第六句義王出家→第七句殿下乗合
- 斯道文庫本 巻第一第二句参内上祿→第三句義王→第四句義王出家→第五句二代之后
- 高野本 巻第一吾身栄花→祇王→二代后
- 葉子十行本 巻第一清水炎上→妓王→殿下騎合

○流布本 卷第一我身の栄花→妓王→二代の後

(「祇王」章段の位置、「ぎわう」の表記に異なりが見られる。国会本・斯道文庫本では、「義王」章段が2章段に分かれているのが注目される。義王・祇王・妓王の表記を「祇王」に統一することとする。)

続いて天草版平家「Guiuō」章段の位置を見る。「Guiuō」章段は、古典平家「祇王」章段の位置を大きく移行させている。高野本の目次にあわせてその様子を示す。

○卷第三有王・僧都死去＝「鹿谷」事件：天草版平家卷第一第十二（最終章段）有王鬼界が島に渡って、俊寛に会い：俊寛死去せらるれば茶毗をして、その遺骨をくびにかけ、都え帰り上り、方々修行して、その後世をとむらうたこと。→○卷第一祇王＝卷第二第一（冒頭章段）祇王清盛に愛せられたこと：同じく仏という白拍子に思いかえられてのち、親子三人尼になり、世を厭うたことと、またその仏も尼になったこと。→○卷第四颯之沙汰・信連・競＝「高倉宮以仁王」の事件：卷第二第二高倉の宮の御謀叛あらわれて、三井寺え落ちさせられたこと、また長兵衛とゆう宮の侍あとに残って合戦をし、生け捕られたこと。

上記のように天草版平家「Guiuō」章段は、大移行を示しているが、このような大きな変化を見せるものは、他の章段では見られない。

一見すると、「Guiuō」章段が、二大事件（「鹿谷」・「高倉宮以仁王」）の連続性を欠くかに見えるが、編者不干ハビヤンの意図的な配置によって「Guiuō」章段は、卷第二冒頭に置かれたものと思われる。卷第二の構成全体の中で考察を行うべきである。

天草版平家卷第一の構成内容をまず見ることにする。

卷第一（第一章段～第十二章段）は、古典平家高野本を代表としてみると、卷第一～卷第三までの内容を取捨選択をしてとりこんだものである。内容にしたがって構成をみると、3区分に分割することができる。なお各区分における主要な題目を記しておく。

第1区分（第一章段のみ）

清盛の先祖歴代の大要を語り、忠盛昇段から、清盛をはじめとする平家一門の威勢繁栄を語る。

題目第一 平家の先祖の系図、また忠盛の上のほまれと、清盛の威勢栄華のこと。

第2区分（第二章段のみ）

摂政基房の車ともめ事を起こした清盛の孫、資盛をめぐる平家悪行の始めを語る。

題目第二 重盛の次男関白殿え狼藉をなされたこと：これ平家に対しての謀叛の根源となったこと。

第3区分（第三章段～第十二章段までの10章段）

卷第一の主題目である「鹿谷」事件を語る。（藤原成親等による平家打倒の策が失敗し、その顛末・後日譚まで）

題目第三 成親卿位あらそいゆえに、平家に対して謀叛を企てられたことが顕れ、その身をはじめ、くみしたほどのもの搦め取られ、そのうちに西光とゆうものわ首をうたれたこと。

第十二 有王鬼界が島に渡って、俊寛に会い：俊寛死去せらるれば茶毗をして、その遺骨をく

びにかけ、都え帰り上り、方々修行して、その後世をとむらうたこと。

次に巻第二の構成内容を見ると、次のようになる。

巻第二(第一章段～第十章段)は、古典平家巻第四・第五の内容を取捨選択をしてとりこんだものである。但し、第一章段を除く。内容にしたがって構成をみると、3区分に分割することができる。なお各区分における主要な題目を記しておく。

第1区分(第一章段のみ)

不干ハビヤンの意図的な配置によって、古典平家巻第一「祇王」章段が、天草版平家巻第二冒頭に置かれている。清盛の「fuxiguina cotoのみをせられてござる」とする結果を語る。

題目第一 祇王清盛に愛せられたこと：同じく仏という白拍子に思いかえられてのち、親子三人尼になり、世を厭うたこと、またその仏も尼になったこと。

第2区分(第二章段～第八章段までの7章段)

「高倉宮以仁王」の事件を語る。(高倉宮以仁王が、源三位頼政にすすめられて企てた平家打倒の顛末・後日譚まで)

題目第二 高倉の宮の御謀叛あらわれて、三井寺え落ちさせられたこと。また長兵衛とゆう宮の侍あとに残って合戦をし、生け捕られたこと。

第三 三位入道の嫡子仲綱馬ゆえに面目を失われたことによって、この恥をすすがうずるとて、謀叛ををこされたこと：ならびに競が宗盛をたばかって主の恥をすすいだこと。

第3区分(第九章段・第十章段の2章段)

「源頼朝の挙兵」を語る。(頼朝の挙兵から、終始源氏方に圧倒される平氏のこと)

題目九 文学のすすめによって頼朝の謀叛ををこさせられたこと、平家わまたこれを平げうとて、討手をくだされたこと。

巻第一第3区分の mufon、巻第二第2区分の mufon、巻第二第1区分の ama ni naru の観察

平家物語において最初に語られる事件は、「鹿谷事件」(巻第一第3区分)である。区分中に用いられる mufon 謀叛の出現度数を見ると、18例も見ることができる。たとえば、○(成親卿)外人もないところに兵具をととのえ、武士を語らいをいて mufon の営みのほかには他事なかった。○(鹿谷に)その夜の酒宴にこの mufon のことをうせあわされてあったれば、○その mufon にくみしたもののわあまたあったなかにまづ俊寛、康頼、西光または行綱などとゆうものでござった、等々。

このような無謀な平家打倒の企ては、成親の平家に対する私憤に起因している。成親の mufon に対して平家物語は次のように、批判している。

なんとぞして平家を亡ぼいて本望を遂げうずると企てられた。これを思えば、いらぬことであった。親の卿にまさってこの成親卿わ大きな国をもあまた持たれ、また子息所従ともに朝恩にほこり、なんの不足もなかったに、このやうな心のついたことわひとえに天魔の所為と見えた。

次に語られる事件は、「高倉宮以仁王」の事件(巻第二第2区分)である。区分中に用いられる mufon 謀叛の出現度数は、全体の中に10例見ることができる。たとえば、○高倉の宮の gomufon の由を披露つかまつたれば、○宮の gomufon すでにあらわれさせられたことによって、○高倉の宮わ

gomufon ををこさせられて、失せさせられたとゆうほどこそあれ、頼政の「なましいに私にわくわたでられず、宮をすすめまいらせ」た平家打倒の企ては、平家に対する私憤に起因している。この mufon に対して平家物語は、次のように評している。

頼政わ伊豆の国を下されて、子息の仲綱わ受領せられ、わが身わ丹波の五箇の庄、若狭の東宮河を知行してさてあらうずる人がよしないことを思いくわたてて、わが身も子孫も亡びられたことわ、まことにあさましい次第でござった。

さて“Guiuō”章段（巻第二第1区分）を見ることにする。

題目第一 祇王清盛に愛せられたこと：同じく仏という白拍子に思いかえられてのち、親子三人 ama ni nari, 世を厭うたこと、またその仏も ama ni natta こと。

聞き手兼進行役をつとめる右馬の允（VM.）と話し手の喜一檢校（QI.）の対話形式により語られるのは、次のものである。

VM. さて誠に誰にも、かれにも清盛わ難儀をかけた人ぢゃの？またその Guiuō がことをも聞きたい、を語りあれ。

QI. 長いことなれども、申さうず、清盛わこのやうに天下を握られたによって、世間の謗をもはばからず、人の嘲りをもかえりみいで、fuxiguina coto のみをせられてござる。

題目に用いられる ama ni naru（尼になる）を追っていくと、Guiuō 章段の主題が明らかになる。巻第一第3区分および巻第二第1区分の ama ni naru の出現度数を表にまとめて示す。

		(go) mufon	ama ni naru	fama uo cayeru	xucqe
巻第一	第2区分	2			
	第3区分	18	2	2	
巻第二	第1区分		6	6	1
	第2区分	10			
	第3区分	6			

(go) mufon を加えて、ama ni naru. fama uo cayeru. xucqe を一緒にしたこの表から得られる点を、箇条書きで示す。

- 1 作表から注目されることは、(go) mufon と ama ni naru、fama uo cayeru の度数差による対立である。

巻第一3区分「鹿谷事件」、巻第二第2区分「高倉宮以仁王の事件」における (go) mufon の度数の大きさが注目される。

「鹿谷事件」は、成親の私憤に起因し、「高倉宮以仁王の事件」は、頼政の私憤に起因し、(go) mufon の出現度数が高い。成親の私憤の原因は、成親が望む官位を得られないことに不満を持ったことにあり、平家に対して mufon を企てたものである。一方「高倉宮以仁王の事件」の私憤の原因は、宗盛の“fuxiguina coto uo xerareta”（源頼政の息子仲綱の愛馬を宗盛に

強引に奪われ、屈辱的な仕打ちを受ける)に、頼政は *mufon* を決意した。

このような *mufon* に代る *ama ni naru* 度数の多い *Guiuō* 章段は、清盛に対する祇王の私憤に起因している。清盛の *fuxiguina coto nomi uo xerarete gozaru* とする権力者清盛の傍若無人の振舞いに抗して、祇王は *ama ni naru* 決意をし、行動に移した。三者三様の内実による平家(清盛、宗盛)に対する (go) *mufon*、*ama ni naru* である。

- 2 *Guiuō* 章段が、二大事件(鹿谷・高倉宮以仁王)の連続性を欠くかに見えるが、*Guiuō* 章段の *ama ni naru* は、かえって巻第二のまとまりを形作る作用をなすといえる。巻第二第1区分 *Guiuō* 章段の *ama ni naru* は、清盛の *fuxiguina coto* を起因とし、続く第2区分の頼政が「なましいに私にわえ企られず、宮をすすめまいらせ」て企てた (go) *mufon* は、宗盛の“*fuxiguina coto*”に起因する。清盛・宗盛親子のなす“*fuxiguina coto*”の結末を語るのが、巻第二の主題である。
- 3 巻第二第3区分6例の *mufon* は、「源頼朝の挙兵」に出現するものである。「高倉宮以仁王事件」に続く第九・第十両段は、*Guiuō* 章段に直接続く章段ではないとして、第3区分の吟味を割愛したが、第1・2・3区分と、連続する特質を注目しておきたい。構成上の連鎖をなす状況を見ることができる。

第1区分の Key word である“*fuxiguina coto*”は、第2区分にも出現する。宗盛の“*fuxiguina coto*”である。清盛・宗盛親子の“*fuxiguina coto*”をなす連鎖が注目される。

さらに第2区分の“年来日ごろもあればこそあったに：三位入道ことし何たる心がついて *mufon* をばをこされたぞ”は、第3区分にも出現する Key word である。“年ごろ日ごろもあったに、今年何たる心がついて *mufon* をば起されたぞ”と呼応している。

- 4 *ama ni naru*、*fama uo cayeru* を吟味しておく。

Guiuō 章段のみでなく、巻第一第3区分に見られる様子を見ておく。

- 成親の北の方 *ama ni nari* かの後世をとむらわれた
- 俊寛の娘 *ama ni natte*、奈良の法華寺に行ないすまいて、父母の後世をとむらわれた
- 成親の北の方 菩提院とゆう寺え入って、*fama uo cayete*、かたのごとくとむらいなどをして、後世をとむらわれた。

これらは、当時の女性が亡くなった人の菩提を弔うために、出家するのが常のことであった姿に同じである。

一方、祇王たちの出家は、次のようである。

- 祇王わ二十一で *ama ni nari*、嵯峨の奥な山里に柴の庵をひき結んで、念仏申していた。
(妹の祇女も) 十九で *fama uo cayete*、姉と一所に籠って後生を願うた
(母のとちも) 四十五で *cami uo sotto*、二人のむすめとともにひたすら念仏申して、ひとえに後生を願うたと申す。

成親の北の方や、俊寛の娘の出家とは異なり、祇王たちの出家は、信仰への意志にもとづいた *ama ni naru*、*fama uo cayeru* である。中世という新しい要素を持った姿と言える。

5 卷第二第1区分 Guiuō 章段、第2区分「高倉宮以仁王事件」および第3区分「頼朝の挙兵事件」は、二回にわたる連鎖が効を奏し、卷第二全体の主題を明確に示している。卷第二は、平家衰亡の前兆を語っていることになる。

“fuxiguina coto”をなす清盛・宗盛親子の行為が、構成上の効果をあげるには Guiuō 章段は、古典平家物語巻第一「祇王」の位置ではなく、大きく移行して巻第二第一章段に位置するのがふさわしい。編者不干ハビヤンの意図による必然性が証明されたことになろう。

3 「灌頂巻」(高野本) と編年体(国会本) の位置

古典平家物語諸本は、「灌頂巻」を十二巻の後に加えているか、いないかによって二大別される。「灌頂巻」を持つ語り本の諸本には、覚一系統本の高野本・葉子十行本・流布本等があり、一方「灌頂巻」を特立しない語り本の諸本には、屋代本・百二十句系統本(斯道文庫本・国会本・京都本等)が含まれる。

「灌頂巻」を持つ覚一系統本の代表として高野本を、「灌頂巻」を持たない百二十句系統本の代表として国会本を用い、「灌頂巻」の有無による平家物語の構成特徴を明らかにしたい。同時に、天草版平家物語における「灌頂巻」のとりこみ方も見ることにする。

最初に、天草版平家物語巻第四(全28章段、実質29章段)の題目を載せることにする。この題目から建礼門院の動向を知ることができる。

天草版平家巻第四の題目は次の通りである。

第一 頼朝木曾が悪行を聞いてそれをしづむるために、代官として弟の範頼と、義経をのほいてそれをしづめうとせらるるを聞いて、木曾平家と一味をしようかつかいをたてたれども、平家同心せられなんだこと。

第二 範頼、義経木曾が討手に上らるること：同じく梶原にわ摺墨、佐々木にわ生食とゆう馬を下されたこと：並びにかれら宇治川の先陣を争うたこと。

第三 義経兵どもに敵をば防がせて、その身わ院の御所え参って、御所を守護せられたこと。

第四 木曾兼平に行きやうて、三百騎になって、また合戦をし、ついに木曾も、兼平も討死せられたこと。

第五 樋口の次郎、降参して後に切らるること：同じく茅野が討死のこと。

第六 源平大手、搦手の大将を分けられて、義経わ三草の合戦にうち勝って、また鶴越えかかられたこと。

第七 熊谷と、平山と一の谷え押し寄せ、軍して一二のかけを争うたこと。

第八 大手生田の森の合戦のこと：同じく鶴越を落され、越中の前司が討死のこと。

第九 平家の一門の人々多う討たれられたその中に、敦盛熊谷に会うて討死のこと。

第十 通盛の北の方、小宰相の局通盛に後れ、身を投げられたこと。

- 第十 都で平家の一門の首を渡したこと、三位の中将夫婦の沙汰。
 第十一 重衡都を渡されて後、三種の神器を屋島え所望せられたこと：同じくその北の方のこと。
 第十二 重衡のあづま下りのこと、同じく千手のまえが沙汰。
 第十三 小松の三位の中将屋島を出て高野え上らるること：同じく滝口、横笛がこと。
 第十四 三位の中将の受戒、重景石童丸がこと、同じく三位の中将身を投げられたこと。
 第十五 池の大納言関東え下られたこと：また三位の中将の北の方のこと。
 第十六 義経と梶原逆櫓の論：同じく屋島え渡って内裏を焼き払い、軍せらるるに、嗣信義経の身代りに立って死んだこと。
 第十七 那須の与一が扇を射たこと：また義経弓を取り返されたこと。
 第十八 義経教能をたばかって生け捕ったこと、義経と梶原と戦いに及ばるること：同じく平家の一門ことごとく亡びられたこと。
 第十九 平家の生け捕り都え入って渡さるること：同じく建礼門院のこと。
 第二十 大臣殿を子副将に対面あること：同じく副将を害すること。
 第二十一 大臣殿の東下り、同じく帰洛の道でくびをはねられ、京中を渡されたこと。
 第二十二 地震のこと、また建礼門院吉田の御坊に住みわびさせられたこと。
 第二十三 大納言の配所にもむかること：並びに建礼門院の大原え御隠居のこと。
 第二十四 昌尊が夜討ちのこと、また頼朝と、範頼不快のこと。
 第二十五 義経の都を落ちられたこと：並びに北条の上洛のこと。
 第二十六 六代を北条召しとってのち、文覚わびことによって頼朝赦免せられたこと。
 第二十七 法皇大原に御幸なされ、女院に御見参あったこと。
 第二十八 六代高野え上らるる事と、平家断絶、また文覚も流され、ついにわ六代も首をはねられたこと。

続いて天草版平家卷第四（全 28 章段、実質 29 章段）と、古典平家（国会本：卷第九～卷第十二、卷第八第 80 句を含む）との対校表を示す。登載句の記述内容を小題目で示す。

国会本	登載小題目	不登載小題目	天草版平家卷第四
第80句	義仲悪行		卷第三第十三
義経熱田の陣	公朝・時成熟田下向 同じく鎌倉へ参着 鼓判官鎌倉参上 義仲平家和議ならず 義仲大赦行はるる事		第一

<p>第81句 宇治川</p>	<p>京・屋島迎年 今井の四郎瀬田を警固する事 仁科・高梨宇治川を警固する事 佐々木の四郎生唆賜はる事 佐々木・梶原生唆の論 範頼・義経京に迫る 宇治川先陣争ひ 大申の重親歩立ちの先陣の事 宇治・瀬田合戦の次第</p>		<p>第二</p>
<p>第82句 義経院参</p>	<p>義仲優女暇乞ひの事 越後の中太家光自害の事 義経禁廷言上 義経内裏を守護申さるる事</p>		<p>第三</p>
<p>第83句 兼平</p>	<p>河原合戦 義仲都落ち 浜いくさ 巴のいくさ 義仲最後 兼平最後</p>		<p>第四</p>
	<p>樋口の次郎帰洛 茅野の太郎光弘討死 樋口の次郎降人 樋口斬られ</p>	<p>摂政還任 義仲敗亡の論</p>	<p>第五</p>
<p>第84句 六箇度のいくさ</p>	<p>平家一の谷の城郭 備前の国下津井のいくさ 淡路福良のいくさ 安芸の国沼田の城のいくさ</p>	<p>西の宮のいくさ 和泉の国吹飯の浦のいくさ 備前の国今来の城のいくさ 福原除目</p>	<p>第六</p>

<p>第85句 三草山</p>	<p>蒲の御曹司大手の大將の事 義経搦手の大將の事 三草山夜討 平家諸方警固 通盛北の方と名残を惜しむ 鴨越に向かはるる事 鷲の尾案内者の事</p>		
<p>第86句 一熊谷の驅 二熊谷の驅 三平山の驅</p>	<p>熊谷父子・平山拔駆け 熊谷名のる事 平山駆け入る事 熊谷駆け入る事 熊谷・平山同心合戦の事</p>		<p>第七</p>
<p>第87句 の梶原二度</p>	<p>一の谷矢合せの事 河原兄弟討死 梶原平次景高が歌の沙汰 景時・景季同心の事</p>		<p>第八</p>
<p>第88句 鴨越</p>	<p>大鹿二つ落つる事 鞍置馬二匹落さるる事 義経落し給ふ事 平家の屋形炎上 能登守逃れ給ふ事 通盛討死 越中の前司最後</p>		
<p>第89句 一の谷</p>	<p>忠度最後 重衡生捕り 敦盛最後 熊谷発心 熊谷牒状 経盛返牒</p>	<p>後藤兵衛後日 師盛討死 経正・経俊・清房・清定・業盛討死 知章最後 河越黒の沙汰</p>	<p>第九</p>

第90句 小宰相身投ぐる事	平家海上に浮かばるる事 首実検の事 小宰相愁嘆 小宰相身を投ぐる事 御乳母の女房髪剃る事	通盛夫婦の歌の沙汰	第十
第91句 渡さるる事 平家の一門首	卿相の首大路を渡すや否やの事 斎藤五・斎藤六首ども見奉る事 三位の中將述懐 三位の中將の文		第十（誤記）
第92句 屋島院宣	重衡大路を渡す事 三種の神器所望の事 院宣 平家院宣の御返事		第十一
第93句 重衡受戒	重衡出家許されざる事 法然上人授戒 硯松蔭法然上人に奉らるる事 重衡大内女房玉づさ 重衡と女房と参会の事		
第94句 重衡東下り	重衡東下り 池田の宿熊野あるじ歌 重衡鎌倉入り 頼朝と重衡と対面 千手の前湯殿へ参る事 千手・重衡遊宴 頼朝・親能物語り		第十二
第95句 横笛	維盛屋島出でらるる事 滝口発心 横笛悲恋 横笛死去 滝口高野の籠居		第十三

第96句 高野の巻	滝口入道対談の事 高野の縁起	維盛高野参詣 延喜の帝御衣を高野に送らるる事 大師帝の御返事	
第97句 維盛出家	維盛出家 重景・石童丸出家 維盛武里に遺言の事 維盛粉河参詣 維盛湯浅に行逢はるる事 重盛熊野参詣の沙汰		第十四
第98句 維盛入水	維盛熊野参詣 維盛入水 与三兵衛・石童丸入水 武里愁嘆	那智籠りの僧、維盛見知り奉るる事 維盛卒都婆の銘	
第99句 池の大納言 関東下り	弥平兵衛宗清述懐 頼朝と池殿と参会 維盛北の方愁嘆 新帝即位	崇徳院神廟	第十五
第100句 藤戸	佐々木三郎先陣の事	源氏室山の陣 平家児島の陣 佐々木三郎瀬踏み 都に大嘗会行はるる事	
第101句 屋島	渡辺・福島船ぞろへ 逆櫓の論 義経四国渡り 勝浦の陣 大坂越 屋島の城落去 言葉だたかひ 嗣信最後		第十六

<p>第102句 扇射の論 扇 的</p>	<p>扇射手の論 与市扇を射る 与市二の矢の高名 水尾谷のいくさ 弓流し</p>	<p>牟礼・高松の陣</p>	<p>第十七</p>
<p>第103句 讒言 梶原</p>	<p>伊勢の三郎義盛、教能を生捕る事 田辺の湛増源氏に参る事 蒲の冠者と九郎判官と一つになる事 判官・梶原口論</p>	<p>住吉鑑の奏聞の事</p>	<p>第十八</p>
<p>第104句 壇 の 浦</p>	<p>知盛いくさ下知 阿波民部心がはり</p>	<p>梶原船いくさ 遠矢の沙汰 源氏の船の中に白旗きたる事 晴延陰陽師ことわざの事</p>	
<p>第105句 早 鞆</p>	<p>先帝・二位殿御最後 建礼門院捕はれ 大臣殿生捕らるる事 飛驒の三郎左衛門の事 能登殿最後 知盛入水 生捕の人々</p>		
<p>第106句 平家 一門 大路 渡し</p>	<p>西国より早馬 明石の浦の嘆き 生捕の衆都入り 牛飼三郎丸の事 大臣殿悲哀 平大納言の婿義経の事 女院出家</p>	<p>宝剣神鏡始末 二の宮御迎へ 頼朝二位に除せらるる事</p>	<p>第十九</p>

第109句 鏡の沙汰	頼朝義経不快	天の岩戸の事 紀伊の国日前像の起り 内侍所炎上のがれ給ふ事 神楽弓立の宮人 二見の浦の鏡 神爾の沙汰	第二十
第110句 副将	大臣殿副将見参の事 大臣殿関東下向 副将斬らるる事 乳母の女房身投ぐる事		
第111句 大臣殿最後	大臣殿父子関東下向 関東たたるる事 上人の説法 大臣殿最後 右衛門督最後 大臣殿父子首渡し		第二十一
第112句 重衡の最後	重衡南部へ渡さるる事 重衡最後	北の方参会 同じく離別の事 重衡処刑論議 阿弥陀供養 北の方出家	
第113句 大地震	九重の塔たはるる事 天文の博士占ふ事 建礼門院吉田の住まい	文徳の御時の地震 朱雀の御時の地震	第二十二
第114句 腰越	九郎判官伊予守になる事 源氏あまた受領の事 梶原讒訴	申し状	第二十三

<p>第115句 時忠能登下り</p>	<p>平家生捕流罪の事 時忠女院に暇乞ひ 時忠異名 時忠能登下り 建礼門院大原寂光院隠居</p>	<p>頼朝文覚招請 義朝菩提院建立の事</p>	
<p>第116句 堀川夜討</p>	<p>土佐房上洛 堀川夜討 土佐房最後 三河守範頼義経討手の事 範頼最後 義経諸方頼まるる事</p>		<p>第二十四</p>
<p>第117句 義経都落ち</p>	<p>義経御下文申し請けらるる事 義経都落ち 同じく吉野の奥に赴かるる事 同じく奥州へ下らるる事 北条時政上洛 十郎藏人討手の事</p>	<p>吉田大納言経房 三郎先生討手の事</p>	<p>第二十五</p>
<p>第118句 六代</p>	<p>北条六代を生捕る事 斎藤五・斎藤六 文覚六波羅へ参らるる事 六代関東下向 乞ひ請け六代 六代御前大覚寺へ参らるる事 六代高雄入り</p>		<p>第二十六</p>
<p>第119句 大原御幸</p>	<p>大原御幸 寂光院のたたずまひ 仏間御寝所のしつらひ 法皇女院と御参会の事 六道問答 龍宮城の夢見</p>		<p>第二十七</p>

	法皇還御 女院死去		
第120句 平家断絶	六代出家 平家の方人誅せらるる事 伊賀大夫誅戮 丹後侍従誅戮 土佐守宗実干死 越中次郎兵衛誅戮 文学謀叛 頼朝死去 文覚流罪 六代誅戮		第二十八

上記の対校表から観察される天草版平家巻第四は、質量ともに他の巻とは異なり、古典平家（国会本）から持ちこんでいる内容が多く見られる。しかし巻第四（全 28 章段、実質 29 章段）の構成上の柱となる主題は、次の 2 点となる。

- 1 義仲・義経の敗北への過程
- 2 平家断絶への過程（重衡・維盛・宗盛・建礼門院・六代の動向）

したがって天草版平家巻第四は、「国会本」巻第八（第 80 句）から巻第十二（第 120 句）までを、集約したものといえる。登場人物のそれぞれが、滅亡へと向かう過程を語りおえるのが天草版平家巻第四である。

さて先にも述べたように建礼門院が一括して描かれる「灌頂巻」を持つ高野本を基本として、「灌頂巻」五章段：女院出家・大原入・大原御幸・六道之沙汰・女院死去をみることにする。比較をするのは建礼門院が分散されて描かれる「灌頂巻」を持たない国会本・屋代本である。また天草版平家も加えて対校表を作り、分析の資料とする。次に示すのが、「灌頂巻」の対校表である。

高野本	国会本	屋代本	天草版
女院出家	第 106 句 平家一門大路渡し 女院出家 第 113 句 大地震 建礼門院吉田の住まひ	建礼門院吉田御房入 御事 同御出家事 <small>付長楽寺阿証上人為御戒師事</small> 元暦二年七月九日大地震事	第 19 平家の生け捕り都え入って渡さるること：同じく建礼門院のこと。 第 22 地震のこと、また建礼門院吉田の御坊に住みわびさせられたこと。
大原入	第 115 句 時忠能登下り 建礼門院大原寂光院隠居	建礼門院大原寂光院 御隠居事	第 23 平大納言の配所にをもむかるること：並びに建礼門院の大原え御隠居のこと。

大原御幸	第 119 句 大原御幸 大原御幸 寂光院のたたずまひ 仏間御寝所のしつらひ	法皇為女院閑居叡覧 大原御幸事	第 27 法皇大原に御幸なされ、女院に御見参あったこと。
六道之沙汰	法皇女院と御参会の事 六道問答 龍宮場の夢見		
女院死去	法皇還御 女院死去		

先に示した天草版平家巻第四と古典平家（国会本：巻第九～巻第十二、巻第八第 80 句を含む）との対校表は、すべての登載小題目を載せているが、「灌頂巻」五章段の対校表は建礼門院とつながる題目・小題目のみを載せている。最も注目される点を簡条的に示す。

1 国会本の小題目が特徴的である。（校注者が、底本目録に新たな小題目＝小見出しを加え、内容把握が容易になっている。）

例として「灌頂巻」女院出家に対応する、国会本第 106 句 平家一門大路渡しを見ることにする。

第 106 句の小題目は 7 項目（西国より早馬 明石の浦の嘆き 生捕の衆都入り 牛飼三郎丸の事 大臣殿悲哀 平大納言の婿義経の事 女院出家）あり、女院出家はその中の一項目にすぎない。

また、記述に注目すると、次の特徴が得られる。

西国より早馬 同（元暦二）じく四月三日、西国より早馬、院の御所へ参る。

明石の浦の嘆き 同（元暦二）じく十六日、判官、大臣殿以下の生捕あひ具して、明石の浦にぞ着き給ふ。

生捕の衆都入り 同（四月）じく二十六日、平氏の生捕都へ入る。

このように時間の流れに沿って、述べられている。「女院出家」は、吉田の住まいの後に、段落をかえ、同（文治元年）じく五月一日、女院御髪おろさせ給ふ。とある。

質・量ともに差はみられるが、「女院出家」の内容は、国会本・屋代本・天草版ともに、似通う部分がある。

「灌頂巻」のように一括して描かれる建礼門院は、十二巻までの自己主張表現の少なさとは異なり、くっきりと像が結ばれる。

2 「女院死去」に「灌頂巻」の特徴が見られる。

国会本・屋代本・天草版の「女院死去」から見ることにする。

国会本：女院死去

女院、つひに建久のころ、龍女が正覚のあとを追ひ、往生の素懐を遂げ給ふ。「冷泉の大納言隆房の卿、七条修理大夫信隆の卿の北の方ぞ、最後までも御訪ひは申されける」とかや。（第 119 句 大原御幸 の小題目の最終項目が「女院死去」である。8 項目の小題目には「灌頂巻」の大原御幸・六道之沙汰・女院死去が含まれている。）

屋代本：巻十二 法皇為女院閑居叡覧大原御幸事（高野本：「灌頂巻」大原御幸・六道之沙汰・女院死去 相当部分である。）ここでは、女院死去 にあたる箇所を示す。

(法皇モ其後ヨリハ、常ニ御訪有ケルトカヤ。)

女院遂ニ建久始ノ比、竜女カ正覚ノ跡ヲ追ヒ、韋提希夫人ノ往生ノ素懐ヲ遂サセ給ケリ。冷泉大納言隆房ノ卿、七条修理大夫信隆ノ卿、此人々ノ北方ソ、最後マテノ御訪ハ被_レ申ケルトソ承ル。

天草版：第27 法皇大原に御幸なされ、女院に御見参あったこと。(大原御幸・六道之沙汰・女院死去が含まれる。) ここでは女院死去にあたる箇所を示す。

そののち法皇もつねにをとむらいどもあって、女院ついに建久のころ御逝去あった(goxeiqio atta)と申す。

さいごに高野本「灌頂巻」女院死去を示す。

奇端往生を遂げる建礼門院、女房達も「往生の素懐を遂げる」とする。

かくて年月を過ごさせたまふ程に、女院御心ち例ならずわたらせ給ひしかば、中尊の御手の五色の糸をひかへつゝ、「南無西方極楽世界、教主弥陀如来、かならず引摂し給へ」とて、御念仏ありしかば、大納言佐の局、阿波内侍左右に候て、いまをかぎりのかなしさに、こゑもおしまずなきさけぶ。御念仏のこゑ、やうやうよはらせましましければ、西に紫雲たなびき、異香室にみち、音楽そらに聞ゆ。かぎりある御事なれば、建久二年きさらぎの中旬に、一期遂におはらせ給ひぬ。きさいの宮の御位より、かた時もはなれまいらせずして候はれ給しかば、御臨終の御時、別路にまよひしも、やるかたなくぞおぼえける。此女房達は、むかしの草のゆかりもかれはてて、よるかたもなき身なれ共、おりおりの御仏事営給ふぞあはれなる。遂に彼人々は竜女が正覚の跡を追ひ、韋提希夫人の如に、みな往生の素懐をとげけるとぞ聞えし。

「灌頂巻」女院死去には、国会本・屋代本・天草版それぞれの特色がよくあらわれている。高野本の建礼門院の奇端往生に比して、国会本・屋代本の簡潔な描写、天草版はさらに簡潔、仏教臭を排する「goxeiqio atta」で終る。

4 おわりに(まとめとして)

これまで述べてきたことの要点を、箇条書きにしてまとめておく。

- 1 古典平家物語巻第一「祇王」章段は、天草版平家物語では古典平家の位置とは大きく異なり、巻第二第一章段へと移行している。編者不干ハビヤンの意図によるものと考え、その必然性を吟味したものである。
- 2 天草版平家巻第二を3区分にわけてみる。

第1区分は、Guiuō章段のみ、第2区分は、第二章段～第八章段までの7章段、第3区分は、第九・第十の2章段となる。

第1区分：祇王に対する清盛の「fuxiguina coto」をせられてござるが、私憤の原因となり、祇王は尼になることを選んだ。

第2区分：「高倉宮以仁王」の事件。宗盛の「fuxiguina coto」をせられたが、私憤の原因となり、頼政は謀叛を決意した。

第1区分のKey wordである「fuxiguina coto」(清盛)は、第2区分では宗盛の「fuxiguina coto」
として出現する。清盛・宗盛親子の「fuxiguina coto」をなす連鎖表現が効果的である。

さらに連鎖表現が続く。第2区分の「年来日ごろもあればこそあったに：(三位入道) ことし何たる
心がついて mufon をばをこされたぞ」は、第3区分にも出現するKey wordである。「年ごろ日
ごろもあったに、今年何たる心がついて mufon を起されたぞ(頼朝)」と呼応している。「fuxiguina
coto」に続く第二の連鎖も効果的である。

「fuxiguina coto」をなす清盛・宗盛親子の行為が、構成上の効果をあげるには“Guiuō”章段は、
古典平家物語巻第一「祇王」の位置ではなく、大きく移行して巻第二第一章段に位置するのがふさ
わしい。

3 壇浦合戦後の建礼門院を一括して描く「灌頂卷」を持つか否かで、古典平家物語は二大別される。

「灌頂卷」を持つ高野本(覚一系統本の代表として)を核として、「灌頂卷」を持たず分散して建
礼門院を描く国会本(百二十句系統本の代表として)、屋代本(古態を残す語り本系の代表として)
の特徴、および天草版平家の建礼門院を観察した。高野本では、巻第十二までは目立たなかった建
礼門院が充分に描かれ、叙情的な要素も多くみられる。一方国会本で描かれる建礼門院は、時間の
流れに沿って、分散し、記録的な・叙事的な要素が目される。また天草版平家物語の建礼門院は、
国会本に近い。仏教要素を排除し、より叙事性が濃くみられる。「灌頂卷」女院死去には、高野本・国
会本・屋代本・天草版それぞれの特色がよくあらわれている。建礼門院の奇端往生(高野本)に比
して、国会本・屋代本の簡潔な記述、天草版はさらに簡潔になり、仏教要素を排する「goxeiqio
atta」で終わっている。

4 この論文では、原本の「r」はすべて「j」とした。

参考図書

- 麻原美子・春田 宣・松尾葦江編(1990)『屋代本高野本対照平家物語』新典社
斯道文庫編(1970)『百二十句本平家物語』汲古書院
島津忠夫・麻生朝道(1982)『小城鍋島文庫本平家物語』汲古書院
水原一校注(1979)『平家物語上・中・下』新潮日本古典集成 新潮社
梶原正昭・山下宏明校注(1991・93)『平家物語上・下』新日本古典文学大系 岩波書店
富倉徳次郎校注(1949)『平家物語上・中・下』日本古典全書 朝日新聞社
梶原正昭校注(1984)『平家物語 改訂版』おうふう
高橋貞一校訂(1973)『平家物語百二十句本』思文閣
江口正弘(1986)『天草版平家物語対照本文及び総索引』明治書院
大津雄一・日下力・佐伯真一・桜井陽子編(2010)『平家物語大辞典』東京書籍
山田孝雄(1911)『平家物語考』勉誠社

(2018年9月27日受理)